

50代の嘆き

50歳代というと、丁度大正8～9年から昭和3～4年生れに当るわけで、第二次世界大戦の時のいわゆる適齢期にあった人々である。そして戦後我国の再建のため大きな貢献をなした年代にあたる人々でもある。

この世代、女子にしても同様であるが、特に男子は戦場へ、軍需工場へと殆んどがかり出されている。現在、統計上その人口構成を見ると、死亡者が多いためかこの年代の所が少なくなっている。これを人口ピラミッド図で見れば、その所がへこんでいることからよく分かる。その後順増して戦後のベビーブームをおこしたことも、また逆に戦中の出生低下を来したことも、すべてこの世代との関わりをもっている。

戦後30余年、戦後は去ったと言われた昭和30年代以降において、この世代の勤め人の多くは、職名はともかく係長、課長補佐、課長、部長といった地位の中間管理職あるいは上級管理職となった。そしてその大部分は、中間管理職となっているのである。

言うまでもなく、上級管理職が中間管理職に比して楽であることもないし、またその様に言うつもりもないが、同情すべき中間管理職は、上級職と下級の一般職の人々との間にはさまって、アジツコの如く押しつぶされているのである。

自分達が、戦場や、軍事的戦場や、外地から帰って来て、元の職場に戻り、あるいは就職した時代は、まだ戦争中の「上司の命令は絶対である」という風潮が根強く残っていた時代であった。その頃20歳代の若者は、上司の前に最敬礼をし、仕事を命ぜられたら一も二もなく行うばかりでなく、意見を言うことも出来なかったのである。

自分は、この様に上から押えられその重みに苦しみ悩みつつ勤務して30有余年勤めて来たものである。戦後育ち・戦後生れの人々は、当時のアメリカ風の教育なり、さかんにもはやされた民主・自由主義を己の好き勝手に解釈して、上司に文句を言うことも、報告復命の悪いことも、あるいは上司に対して全然挨拶をしないことすらもある。最低の礼儀として挨拶位と思うのは、我々50代の者のノスタルジックなのだろうか。

それに加えて、社会的には丁度定年制の問題、年金問題、退職手当問題など、どれをとっても50代の人々にとっては身近なそして重要なことばかりに突き当たっているのである。

定年制は、あと何年も勤務を残さない自分がいつ退職して行くかの問題であり、また第二の人生を考えるためにはこれが明らかになっていないと次の計画を定め難いものである。

年金問題は、更に重要なことである。自分の老後考えた場合、30有余年月々の給料の中から天引きされて来た高率の納付金が基礎にあるので、一般的な年金制度とは同一にして考えることは困難である。もっとも、国の福祉制度が完備して、いかなる老人も人間として十分な生活をして行ける保障がされるならば別であるが。そうでない限り、これも難しい問題である。当然その時点では、退職手当制度は年金の中に組み入れられて解消して行くことと思われるが、現在の段階ではいまだこれを無視することは出来ないと思われる。

年をとると、「今の若い者は!!」とよく言うのはいつの時代でも同じだと言われているが、この30余年の様に変化の激しい時代に20代から50代へと成長した我々50歳代の者がその様に言ってもおかしくはないと思う。これは自我自尊であろうか。

このことは、戦争中確実に自分を大切にしなければ生きられなかった人間の本性（むしろ動物的本性といった方がよいかもしれぬ）に養われた人々と、求めれば得られるという時代（生きてゆかねばならぬということも第二義的に考えても生きられる）に生きた人間との相違ではないだろうか。しかし、このことには若干の特例があるので誤解しないでほしい。ある特定の人々は、戦後昭和20年代に、生きるためにそしてひとかけらのパンを求めために戦中の人々と同じ様に生きて来たのである。その様な人々の中には、むしろ今まで述べて来た様な若者像はないし、むしろ50代の我々も取ってしまって範とする様な人の多いことは知られている。

生きる、生きて行かねばならぬという現実感が、人間の人格形成に良きにつけ悪きにつけ重大な影響を及ぼしているのではあるまいか。このことは、大きくは社会環境の面からも、身近には家庭環境の面からも考えられることである。

我々50代も、若者達の行為を嘆くばかりでなく、現代のこの社会環境を少しでもより良くすることに努力する必要がある。（小林 真）